

別 紙

1. 訪問先 : 三重果菜市场
2. 訪問日時 : 令和7年4月16日(水) 8:00~9:00
3. 訪問目的 : 台湾市場における各国りんごの現地販売状況、品種や価格等の調査を行い、本県りんご輸出の参考とする。
4. 概要 : 1986年に三重市(現在の新城市)が開設した卸売市場。午前3時から午前11時までの営業で、台湾産の青果物のほか、台湾に流通する世界各国の青果物が取引されている。
5. 所感 : りんごの取り扱い状況について市場内を歩いて調査した。日本産りんごは青森県産りんごのみで心強く感じた。県産リンゴは白の発泡スチロール箱に入れ、品種はふじと王林、一部本県産ぐんま名月で占められていた。アメリカ産は段ボール箱に入れ、特にワシントン州で開発されたという新種「コスミッククリスプ」が多く扱われていた。ニュージーランド産は段ボール箱に入れてあるほか、プラスチックの筒に小玉りんご5個やプラバケツに10個ほど入れ店頭に並べられていた。南半球に位置するニュージーランドは、季節的に今の時期が数量が多く目立った存在である。

価格を確認した店では、青森県産贈答用高級ふじが1箱(12個入)1万2千円(1個千円)という驚きの価格だった。また、青森県産ぐんま名月12個入が1個100円(約360円)、アメリカ産ふじは64個、1800円(1個約100円)であった。

卸売市場を出てから、市内の果物店にも立ち寄った。県産ふじが1個200円(889円)、ニュージーランド産ふじが1個29円(128円)で販売されていた。

以前、本県の「とき」について台風襲来前の早もぎが、おいしくないとの評価になり、「とき」を扱った台湾業者は大損をしたという事案があった。以降、同様の事案は発生していないが、同じ過ちを繰り返すことがないように、本県りんご関係者は教訓としなければならない。「まずければ買わない」が市場の鉄則である。品質の悪いものは市場に出さないということを引き続き徹底しなければならない。市場には本県産りんご以上にアメリカ産りんごも販売されている。また、以前よりニュージーランド産が多く扱われている感じがした。ニュージーランド産はプラスチック筒に小玉りんごを入れて販売するなど、女性や若者にターゲットを絞った戦略も展開している。市民はどちらを選ぶのも自由であり、改めて選ばれる青森県産リンゴの輸出を徹底する必要性を強く感じた。

《三重果菜市场にて》



《青森県産ふじ》



《ニュージーランド産りんご》



《アメリカ産コスミッククリスプ》



《市内果物店・青森県産ふじ》



《市内果物店・ニュージーランド産ふじ》



1. 訪問先 : 中華民國旅行商業同業公会全国連合会

2. 訪問日時 : 令和7年4月16日(水) 10:00~11:00

3. 訪問目的 : 中華民國旅行商業同業公会全国連合会では、コロナ後の台湾・青森相互の観光客動向や課題について調査し、青森・台北線定期便の運航再開の効果について調査する。

4. 対応者 : 柯牧洲氏(台北市旅行商業同業公会全国連合会副理事長、台北国際観光博覧会執行長)
丁萊氏(台北市旅行商業同業公会全国連合会副理事長、永利旅行社)

5. 説明内容: 概要

中華民國旅行商業同業公会全国連合会は、旅行品質の向上を目的に53年前に発足した。現在台北市内においては1,430社が加盟しており、定期的に勉強会を実施し、会員の交流を図っている。毎年5月と8月には国際旅行博覧会を開催しており、去年は約33万人の入場者があった。8月に開催される国際旅行博覧会には、青森県や他の県にも参加を期待しているとのことであった。

台湾からの海外旅行者数は、コロナ禍前の2019年に約1,700万人。コロナ禍を経て、2024年にはその93%にあたる約1,685万人まで回復している。特に日本はコロナ禍前と同様、台湾人にとって最も人気のある旅行先の一つであり、2024年の台湾から日本への旅行者数は約604万人にのぼり、2025年も600万人規模の渡航が見込まれている。一方で、日本から台湾への旅行者数は132万人と依然として低く、特に教育旅行などの団体旅行の回復が鈍いが、円安の影響でやむを得ない面もあると受け止めているとのことだった。

現在、東北地方の中でも青森県は注目度が高く、特に弘前桜まつりや青森ねぶた祭が人気を集めている。期間中には飛行機の座席やホテルの確保が困難となっている。青森県は団体旅行の訪問先として認識が定着しており、直行便の座席の大半を旅行会社が買い取る形で運航され、搭乗者のほぼすべてが団体旅行者で占められている。

6. 質疑:

Q. 青森から台湾への旅行商品の構築について、観光の他にも外国人向けの体験型コンテンツはあるのか。

A. 原住民の食文化や伝統的な活動イベントへの参加、台湾の医療技術を活かした人間ドッグ、美容体験などがある。一部の体験は団体での対応が難しいため、事前予約が必要。人間ドッグはホテルと提携して、専用のバスを運行している。一般の旅行者向けには、ホテル観賞や有名な湖の観光、原住民料理を楽しむツアーなど、季節に応じた体験型コンテンツの提供が検討されている。また、農業施設での農業体験や、IT産業の先端工場を視察するプログラムを取り入れることも可能である。

Q. 青森県のまつり期間中のホテル確保問題について要望はあるか。

A. まつり期間中は宿泊施設の価格が高騰することが多く、これは需要と供給の関係上、ある程度はやむを得ないものと理解している。しかし、旅行商品を作る際、料金の大幅な変更が直前に生じると調整が困難になるため、最低でも1~2週間前には価格改定の情報がほしい。

Q. バスやタクシーの運転手不足について日本では担い手の確保が課題となっているが、台湾での状況はどうか。

A. 台湾においても、労働時間の長さや高齢化の進行で担い手不足が課題。現在、路線バスの運転手は約600人、観光バスの運転手は約2,000人不足している状況。このような人手不足に対応するため、各地方自治体では奨励金制度を設け、教習所への入学を促すなど、担い手の育成に取り組んでいる。

7. 所感: 台湾と日本は長年にわたり深い縁で結ばれており、コロナ禍を経た現在でも台湾から多くの観光客が訪れていることは、大変喜ばしいことである。弘前さくら祭りや青森ねぶた祭りなどのシーズンには観光客が集中し、航空券やホテルの予約が取りづらい状況が生じているほか、台湾側でツアー商品を作る際に、東北6県でバスの供給が不足しているとの指摘もあった。観光客の流れを分散させ、

年間を通じた安定的な観光客の誘致を図るためにも、オフシーズンの魅力発信を強化するとともに、受け入れ体制の充実とインフラ整備を着実に進めていかなければならないと考える。



-
1. 訪問先 : 台湾互克國際（股）公司
 2. 訪問日時 : 令和7年4月16日（水） 13:30～14:30
 3. 訪問目的 : 果物の台湾への各国からの輸入状況や、台湾における青森りんごの評価や課題について調査し、青森県産りんごの輸出拡大や価格の安定につなげる。
 4. 対応者 : 台湾互克國際（股）公司 季 昭 志 様
台湾互克國際（股）公司 余 鐵 為 様
 5. 調査結果
 - (1) 説明と質疑の内容

台湾へは、青森県産りんごが年間約2万t以上輸入されていて、主に贈答用が高値で売れている。

Q 青森県産りんごの輸入状況について

 - ・青森県産りんごの相場は年々上昇しているので、台湾市場の状況は厳しくなっているが、円安の影響で多少助かっている。一方で昨年の仕入れ単価を安く調整できたので売上が最高となった。
 - ・台湾では年末やお正月の贈答品として高値で取引されるため、特に青森県産りんごの人気と需要が高くなっている。
 - ・残念なことに今年の春節の時は、在庫不足で苦労した。

Q アメリカ産りんごをはじめとする外国産りんごの輸入状況について

 - ・青森県産りんごの人気は圧倒的だが、一般庶民は価格の安いアメリカ産りんごを好んで買っているため、アメリカ産りんごの輸入量が増えている状況にある。
 - ・国内の景気の悪化がりんごの販売需要にも影響している。
 - ・去年は、クリスマスの贈答用の青森県産りんごが不足したため、輸入のタイミングの検討が必要と思う。同時に、県産りんごの品薄状態を改善することを望む。
 - ・台湾では、青森県産りんごは高級ブランドとして認知されている。つる割れ等の訳ありりんごは味が良くてもイメージダウンにつながる為、輸出はやめてほしい。
 - ・台湾人は果物を多く好み食べるがりんごが一番多い。

Q 市場ではニュージーランド産のりんごが多く見られたが現状はどうか。

 - ・南半球からのりんごの輸入も多い。一番はチリ産だが、近年、味が落ちたように感じる。一方で青森産の有袋ふじは見た目、味ともに一番である。
 - ・円高や台湾の経済状況によっては、青森からの輸入量が減る可能性がある。

Q 青森県産りんご全般ついて感想を聞きたい。

 - ・今までは赤いりんごが主流だったが、黄色いりんごをもっと宣伝してほしい。特に食べごろ等の

説明や特徴をもっと説明すれば、高値で取引され、新しい販路拡大に繋がる。

(2) 所感

世界経済の動向や関税、収量等による価格の変動は仕方がないと思うが、青森県産りんごの海外へ輸出拡大は今後も幅広く実施していくべきで、検疫等を行う体制や生産者の理解のもと幅広く進めるべきと考える。

6. 県政への反映方策

- ・りんごの輸出によってどのような効果があるのか解りやすく公表し、県民にも台湾との関係を理解する取り組みをする。
- ・青森県のイメージアップを更に積極的に現地と協力して行う。
- ・黄色りんごのPRと同時にりんごの品種別の食べごろを説明し、理解して頂く取り組みを検討する。



1. 訪問先 : 国立台北教育大学・北師美術館

2. 訪問日時 : 令和7年4月16日(水) 15:00~16:00

3. 調査目的 : ①国立台北教育大学の特徴と北師美術館との関係について、②北師美術館を通じての日台交流について、③開催中の草間彌生氏の作品展の開催状況について調査することを目的とする。

4. 対応者 : 郭館長・王副館長・趙学芸員

5. 調査先状況 : 北師美術館は、2011年に、「新しいかたちのミュージアム」を理念に掲げ、国立台北教育大学の直属機関として設立された。設立に携わった林曼麗教授は、日台文化交流に深い情熱を注ぎ、2017年には日本の外務大臣表彰、2023年には日本と台湾の学術交流および相互理解の促進に寄与したことにより旭日中綬章を受賞した。

「美術を最も理解する教育大学、教育を最も理解する美術館」という理念のもとに創設された北師美術館は、台湾総督府国語学校として創立された国立台北教育大学の歴史を背景に、台湾の近代美術の源流ともいえる絵画教育が行われ、黄土水や顔水龍といった台湾美術の第一世代の多くを輩出した。

日台交流では、林教授は台湾の文化芸術史の研究と展覧会企画に力を注ぎ、2012年の開館記念展や2017年の日本近代洋画展では、東京藝術大学美術館と連携し、日本の江戸末期から戦前にかけての西洋画の日本への影響にまで遡る構成とし、台湾で初めて本格的な日本近代洋画史の展覧会を開催した。

また、台湾現代美術の育成にも力を入れていて、世界的に活躍する映画監督である蔡明亮氏と林教授が協働して、美術館での映画上映という斬新的な取組をして台湾現代美術界に大きなインパクトを与えた。

国際交流の取り組みとしては、メトロポリタン美術館やルーヴル美術館との共催で、世界の漫画家がルーヴルを題材に描いた作品を紹介する「ルーヴル漫画展」を開催し、日本でも巡回展示を行った。また、京都大学ミュージアム連携とも協力し、14大学博物館の収蔵品を通じて、京都の文化と学術研

究、文化材保存について紹介する展示も行った。

本県とのかかわりについては、青森県立美術館と共同で、浮世絵から現代アート、アニメーションにまで登場する美少女像を通して視覚文化史を巡る「美少女の美術史展」を開催し、当時の杉本館長が、りんご娘を連れて特別イベントを開催した。

開催中の「草間彌生展」の基盤となるダブルコレクションの作品は、現在、青森県立美術館に寄託されているもので、2005 年より以前の作品を中心として展示されている。台湾で展示されるのは初めてであり、草間彌生氏の若き日から 70 歳ころまでの創作の歩みを一望することができ、創作史を体系的に理解することができる機会である。

6. 調査結果を本県政に活かすための展望

対応者である趙学芸員の説明のあと、日本や本県との関わりや交流などについて相互に質問や意見が交わされ、活発に情報交換ができた。

館内を案内してもらい、開催中の草間彌生展を鑑賞したが、草間氏独特の水玉（ドット）の作品の色彩に多くの入場者が魅了され賑わっていた。草間氏の作品 51 点が県立美術館に寄託されていることから、引き続き、本県と台湾との文化交流や人的交流も積極的に推進していきたい。

エバー航空の直行便が定期就航していることもあり、交流人口の拡大や地域経済への恩恵をもたらす効果もあることから、本県と台湾との国際交流も進めていきたい。



1. 訪問先 : TSMC 台積創新館

2. 訪問日時 : 令和 7 年 4 月 17 日 (木) 10:00~11:30

3. 調査の目的: 青森県では、台湾の半導体関連企業に対して本県の立地環境について幅広く情報発信し、本県への産業立地を促進するため、台湾半導体関連企業説明会を昨年 12 月 13 日に開催し、県で

は、この説明会を契機に、台湾企業との結びつきを一層強め、半導体関連企業をはじめとした成長が見込まれる分野への誘致活動を強化していくこととしている。

また、台湾の大手半導体メーカーTSMCの熊本県進出や、次世代半導体の国内量産を目指して国内大手企業が共同出資して設立したラピダスの北海道での工場建設の動きなど、全国各地で半導体工場の新設ラッシュが起こっている。熊本県では、地価が3割アップするなど10年間の経済波及効果は6兆円、ラピダスは、2027年の稼働から10年間で北海道への経済波及効果を18兆円以上と試算されており、そこで生まれる雇用を踏まえると、新たな企業誘致がもたらす効果は計り知れないものであり、TSMC台積創新館を調査し、半導体について学び本県の半導体企業誘致の参考とする。

4. 調査概要：

○調査先の状況

TSMCの正式名称は「台湾積体電路製造股份有限公司であり、台湾積体電路製造を略して「TSMC」と呼ばれている。創業者は、モリス・チャン（張忠謀）氏で、1987年に創設したTSMCは、工場を持たずに半導体設計を行う「ファブレス企業」の製造を請け負うことで成長した企業であり、TSMC台積創新館は、TSMC本社に付設されている施設で、日本でいうPR館や展示施設と同様に、説明ガイドや説明パネル展示エリアを通し、TSMC創業と発展の歴史と半導体について学びを深めることができる施設となっている。

また、日本人向けの音声ガイドも整備され、ガイドが付かなくても施設内の説明を理解できる環境が整備されており、特に、最後に体験できるVR(仮想現実)技術を用いた展示施設は、VR体験特殊マスクを装備し、近未来の仮想を体験することも可能となっている。

○調査結果を本県政に活かすための展望

半導体は、現代の情報技術や通信インフラの進化に欠かせない要素があり、その役割は今後ますます重要になっていくものと思われる。次世代半導体の進化は、日常生活から新しい産業の発展まで、幅広い影響を及ぼすことが期待されていることから、様々な分野での応用が進むことで、私たちの生活はより便利で快適なものになるものだと感じる。

また、医療分野においても、次世代半導体の活用が進んでおり、高精度のセンサーや処理能力を持つ半導体は、診断機器や治療機器において、より早く、より正確な情報を提供することが可能であり、特に、IoT・AI・5G・ビッグデータ活用など、世界中でデジタル社会への移行が進んでいるため、中長期的な視点から見て半導体の需要は高いものと推察される。そのため、半導体がもたらす未来は計り知れず、本県における半導体など今後の成長が期待される産業や分野の育成支援に積極的な姿勢で企業誘致に取り組むよう提起していきたい。

今回、TSMC工場等の見学は出来なかったものの、工場周辺にはTSMC関係会社等の社屋やマンションなど多くの建物が建設中であり、一つの半導体企業がもたらす経済効果は計り知れないものであると現地を見て強く感じとることができた。

